佐久市埋蔵文化財調査報告書　第213集

周防畑遺跡群　道常遺跡Ⅱ

長野県佐久市長土呂道常遺跡Ⅱ発掘調査報告書

２０１３
佐久市教育委員会

例　言

1　本書は角田毅による平成24年度宅地造成工事に伴う周防畑遺跡群道常遺跡Ⅱの発掘調査報告書である。
2　事業主体者　角田　毅
3　調査主体者　佐久市中込3056　佐久市教育委員会　教育長　土屋　盛夫
4　遺跡名及び発掘調査所在地
　周防畑遺跡群　道常遺跡Ⅱ　佐久市長土呂字道常1246-1･3、1252-1･2
5　調査担当者　上原　学
6　本書の編集・執筆は上原が行った。
7　本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

1　遺構の略称は以下のとおりである。
　H－竪穴住居址　　Ta－竪穴状遺構　　D－土坑　　P－ピット
2　スクリーントーンの表示は以下のとおりである。
　遺構
　地山断面　焼土　床下

　遺物
　黒色処理　須恵器断面
3　挿図の縮尺は以下のとおりである。
　遺構－竪穴住居址・竪穴状遺構・土坑・ピット　1/80
　遺物－土器･石器･鉄製品1/4、古銭1/1
4　遺物の写真番号と実測図番号は一致する。
5　遺構の標高は、水糸高を標高とした。
6　調査グリッドは4×4mである。
7　遺物表中の［ ］は推定値、〈 〉は残存値を表す。

目　次

例言・凡例・目次
第Ⅰ章　発掘調査の経緯
　第1節　発掘調査の経緯 …… 1
　第2節　調査日誌 …… 2
　第3節　調査体制 …… 2
　第4節　発見された遺構と遺物 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の環境
　第1節　自然環境 …… 2
　第2節　周辺遺跡 …… 3
　第3節　基本層序 …… 5
第Ⅲ章　遺構と遺物
　第1節　竪穴住居址（H） …… 5
　第2節　竪穴状遺構（Ta） …… 6
　第3節　土坑（D） …… 8
　第4節　ピット（P） …… 10
　第5節　遺構外遺物 …… 11
写真図版

長野県佐久市位置図

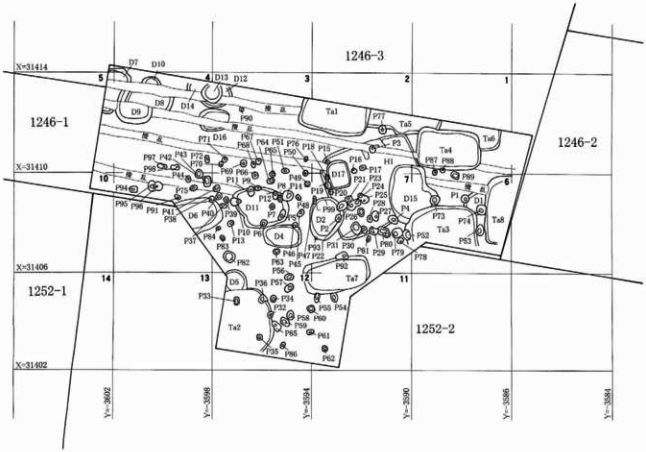
第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査の経緯

周防畑遺跡群は佐久市北部に位置し、佐久地域特有の浅間山の麓から放射状に延びる浸食谷に挟まれた田切地形の、南北方向に細長い台地上に展開する縄文時代から中世に至る複合遺跡である。開発地域は遺跡群南の南西方向に傾斜する標高 709m内外を測る台地上に位置する。周辺は、以前から遺跡の密集する地域として周知されており、近年では高速道路建設、区画整理事業、学校建設といった大規模調査によって弥生時代から平安時代を中心とする多くの遺構・遺物が発見されている。

今回、角田毅による宅地造成工事が行われることとなり、平成25年1月に進入道路部分の試掘調査を実施した。その結果、竪穴住居址・土坑等の遺構が発見された。これにより、開発主体者側と協議を重ね、進入道路部の発掘調査を佐久市教育委員会が主体となり実施する運びとなった。なお、宅地面は盛土であることから、今回の開発では調査対象外とした。

調査区位置図（1:50,000）



遺構配置図（1:150）

第２節　調査日誌

現場作業

平成24年度

平成25年1月17日　埋蔵文化財試掘調査

１月18日～　文化財保護協議　進入道路部分に所在する遺構の発掘調査を実施することとし、宅地面については調査対象外とした。

１月31日　埋蔵文化財委託契約

２月１日～　主体者側の重機による表土除去作業開始。機材準備・搬入。

２月４日～２月８日　調査員による発掘調査。検出作業・遺構掘り下げ・図面作成・写真撮影・機材撤収・整理。主体者側による基準杭設定作業。

室内整理作業

２月12日～３月７日　遺物洗浄･注記･接合･実測･写真撮影､図面修正･写真整理､図版作成･制付本作成。

３月４日　埋蔵文化財変更契約

３月７日　平成24年度埋蔵文化財発掘調査業務完了。

平成25年度

４月18日　埋蔵文化財委託契約

４月18日～　校正作業、報告書刊行、図面・遺物整理作業。

第３節　調査体制

調査受託者

佐久市教育委員会　教育長　土屋盛夫

事　務　局

平成24年度

社会教育部長	伊藤明弘				
文化財課長	吉澤隆				
文化財調査係長	三石宗一				
文化財調査係	須藤隆司	小林眞寿	羽毛田卓也	冨沢一明	上原学
	並木節子	神津一明	久保浩一郎		
嘱託職員	林幸彦				

平成25年度

社会教育部長	矢野光宏				
文化財課長	三石宗一				
文化財調査係長	比田井清美				
文化財調査係	須藤隆司	小林眞寿	冨沢一明	上原学	
	神津一明	久保浩一郎			
嘱託職員	林幸彦				
道常遺跡Ⅱ調査担当者	上原学				
調査員	赤羽篤	浅沼勝男	岩松茂年	小幡弘子	小島真
	羽毛田利明	比田井久美子	武者幸彦	横尾敏雄	依田好行

木内修一　中澤登
渡辺学

第４節　発見された遺構と遺物

遺　構　竪穴住居址－1軒（古墳時代）　竪穴状遺構－8基（中世）　土坑－16基（中世）
ピット－99個（中世・近世？）

遺　物　土師器（坏･碗･甕）　石器・石製品（すり石･砥石）　須恵器（坏･甕）
鋼製品（古銭）　古代瓦（平瓦　1片・丸瓦　1片）　鉄製品（角釘等）

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　自然環境

佐久地域は、周辺を山地台地に囲まれた盆地状を呈し、一般に佐久平と呼ばれ、北には雄大な浅間山、南には蓼科山が存在する。東には群馬県との境を成す北関東山脈の北端が延び、西は御牧原・八

重原といった小高い台地が広がり、蟇科山の裾野と接している。佐久地域における水系の代表は、南方の川上谷に源を発す千曲川で、北流しながら支流を集めつつ水量を増して佐久平に入る。その後野沢付近から流れを北西に変え、蟇科山麓の支流を集めた片貝川、浅間の麓に源を発す湯川、関東山地からの支流を集めた滑津川といった河川と合流し、蛇行しながら上田、長野方面に貫流する。この山地に囲まれ、水にも恵まれた盆地状の佐久平は、地質学的に見ると大きく二分することができ、志賀川と滑津川が合流し、さらに千曲川と川筋を一つにする東西線を境として、河川の北側段丘上と南側では20m前後の比高差が認められる。この北部地域は北方の浅間山麓部の緩やかな台地で、浅間山の噴出物である火砕流軽石流と降下火山灰が厚く堆積している。この堆積物は雨水による浸食に弱く、長い年月の間に深く削り取られ、浅間山の麓から放射状に幾筋もの浸食谷（田切り）を形成している。

これに対し南部地域は千曲川の氾濫源沖積地と滑津川の谷口扇状地等で、河床礫層と沖積粘土層地帯が主となり地下水位も高く、地盤の安定した土地である。このため南部一帯は広く水田として利用されている。今回調査を実施した、道常遺跡は北部地域の浸食谷（田切り）に挟まれた南北方向に細長い台地南端付近の、標高709m内外を測る南方向に向かう緩やかな傾斜地に位置する。

第2節　周辺遺跡

縄文時代－西方の台地端部近くに位置する西近津遺跡Ⅷから縄文後期の遺構・遺物が発見されている。土器は堀之内式の深鉢等で、比較的残存率の高い好資料である。また、小型の土偶、石棒も出土している。

弥生時代－周辺には弥生時代中期後半から後期の集落が存在する。代表的な遺跡として周防畑遺跡A・B、大豆田遺跡Ⅰ・Ⅱ、大豆田遺跡Ⅳ、西近津遺跡Ⅶ等を挙げることができる。近年では大規模な調査が行われ、東に隣接する地域では、区画整理事業に伴い若宮遺跡Ⅳ、宮の前遺跡Ⅰ・Ⅱ等の発掘調査によって、中期後半（栗林期）から後期（箱清水期）の住居址が多数発見されている。南方では学校建設に伴う大豆田遺跡Ⅳの発掘調査が行われ、弥生時代後期の住居址、溝跡、土器を多量に含む黒色の包含層などが発見されている。また、西方の西近津遺跡群内では、平成18年に県埋蔵文化財センターによって高速道路建設に伴う西近津遺跡の発掘調査が行われ、長辺18mを測る巨大な後期の住居址が発見され注目された。

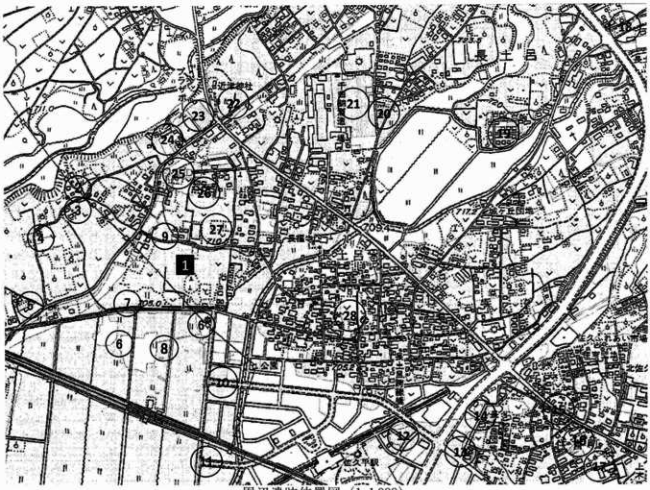
古墳時代－古墳時代前期は弥生時代中期後半から急激に遺跡数が増加したにもかかわらず、佐久市内における遺跡の数が激減する。集落の規模も小規模なものが多いようである。本遺跡周辺では集落と呼べるような遺跡は今のところ確認されていない。遺跡数が増加し始めるのはカマドが導入され始める中期後半（5世紀後半）になってからである。この時期になると周辺地域に多くの遺跡が存在し、北の若宮遺跡、南近津遺跡、東方の若宮遺跡Ⅳ、宮の前遺跡Ⅰ・Ⅱ、南方の周防畑遺跡、大豆田遺跡Ⅰ・Ⅱ、西方の西近津遺跡Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ等から多くの遺構が発見されている。

奈良・平安時代－周防畑遺跡群内及び周辺の遺跡群に多くの遺跡が所在する。周防畑遺跡群内の代表的な遺跡に周防畑遺跡、若宮遺跡、道常遺跡、南近津遺跡、宮の前遺跡Ⅰ・Ⅱ、大豆田遺跡Ⅰ・Ⅱ等が認められる。西方の谷を隔てた台地上に所在する西近津遺跡群内で実施した遺跡からも多くの遺構が発見されている。遺物については、本遺跡の周辺で、土器の表面に「大井」と墨書・刻書された土器が多数出土しており、周防畑遺跡群周辺地域が延喜式に記された佐久市十郡の一つである「大井郷」の比定地とする根拠の一つとなっている。しかし、周辺及び北部地域の遺跡では、数は少ないものの、遺物中に十郡の一つである「刑部」に関係する「刑部仁丸」「刑部」と墨書された土器が発見される事にも注意をはらいたい。現在、「刑部」は佐久市南部地域に比定地が存在することから、遺物を伴った人の移動があった可能性も考えられる。また、茂田井地区と本遺跡周辺の長土呂地区は古代の瓦が、比較的まとまって出土する数少ない地域として以前から知られており、周防畑遺跡群内の台地上に瓦を葺いた古代寺院等の建造物が存在していたと推測されている。

中世・近世－この時代の代表的な遺跡は城館跡であり、佐久平一帯において、平城・山城と考えられる地域は多数存在する。本調査区周辺では東方の濁川対岸に長土呂館跡が所在する。館を構えた人物の断定はできていないが、佐久市志では鎌倉時代に北条氏に近い薩摩氏によって構築されたものと考えるのが妥当であろうと記している。遺構は、ほとんど現存しないが、東西120m、南北135m程度の範囲の外側に濠をめぐらせ、内側に1.5m程度の土塁があったと推定されている。この他、調査区に近接する区画内道路整備に伴い行われた道常遺跡の発掘調査では、竪穴状遺構、掘建柱建物址、木枠が残存した井戸状の土坑も確認されている。

No	遺跡名	所在地	遺跡番号	旧	縄	弥	古	奈	中	近	備考
1	造宮遺跡Ⅱ	長土呂字遺宮	7		○	○	○	○	○		H 24 年度調査
2	西近津遺跡Ⅸ	長土呂	29			○	○	○	○		H 23 年度調査
3	西近津遺跡Ⅵ	長土呂字森下	29				○	○			H 20 年度調査
4	西近津遺跡Ⅷ	長土呂	29		○	○	○	○			H 22 年度調査
5	西近津遺跡Ⅴ	長土呂字三貫畑	29			○	○	○			H 20 年度調査
6	堀跡遺跡	長土呂字大豆田端	7			○	○	○			S 55 年度調査
7	大豆田遺跡Ⅰ	長土呂	7			○	○	○			H 17 年度調査
8	大豆田遺跡Ⅳ	長土呂	7			○	○	○	○		H 24 年度調査
9	森下遺跡	長土呂	7		○	○	○	○			H 21 年度調査
10	中伸田遺跡	長土呂	7			○		○			H 7 年度調査
11	辻の前遺跡	長土呂字辻の前	7			○					H 11 年度調査
12	下舘母塚遺跡	長土呂字下舘母塚	41			○	○				H 9 年度調査
13	直路遺跡Ⅰ	長土呂字直路	41			○			○		H 9 年度調査
14	直路遺跡Ⅱ	長土呂字直路他	41		○	○	○	○	○		H 9 年度調査
15	上直路遺跡Ⅱ	岩村田	41			○	○				H 9 年度調査
16	上直路遺跡	岩村田	41			○					H 9 年度調査
17	上直路遺跡Ⅲ	岩村田	41				○	○	○		H 18 年度調査
18	南上中原遺跡Ⅰ	長土呂	8					○	○		S 63 年度調査
19	前山遺跡Ⅰ	長土呂字下前山	8						○		H 5 年度調査
20	照防隊A遺跡	長土呂	7						○		S 54 年度調査
21	南下北原遺跡Ⅰ	長土呂字南下北原	7					○	○		H 21 年度調査
22	東近津遺跡Ⅰ	長土呂東近津	6						○		H 15 年度調査
23	西近津遺跡	長土呂字西近津	29			○	○				S 46 年度調査
24	西近津遺跡Ⅱ	長土呂	29		○		○				H 15 年度調査
25	西近津遺跡Ⅲ	長土呂	7			○	○	○			H 21 年度調査
26	若宮遺跡	長土呂	7					○	○		S 58 年度調査
27	宮の上遺跡他	長土呂	7		○	○	○	○	○	○	H 22・23・24 年度調査
28	長土呂舗跡	長土呂字城	40							○	

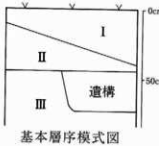
周辺遺跡表



周辺遺跡位置図（1:1,000）

第３節　基本層序

遺跡は、浅間山の麓から放射状に延びる浸食谷に挟まれた、田切り地形の細長い台地末端近くに立地する。この付近は、現在の浅間山が形成される過程で噴出した軽石流が基盤となっており、この上面を現在の表土が覆っている。今回調査を実施した地域の基本層序は以下のとおりである。



基本層序模式図

Ⅰ層は層厚20cm内外を測る耕作土で、しまり・粘性の少ない極暗褐色土である。

Ⅱ層はⅠ層からⅢ層への暗褐色漸位層である。

Ⅲ層は浅間山の噴出物である第一軽石流のロームである。遺構確認は、Ⅲ層上面で明確に判断できる。

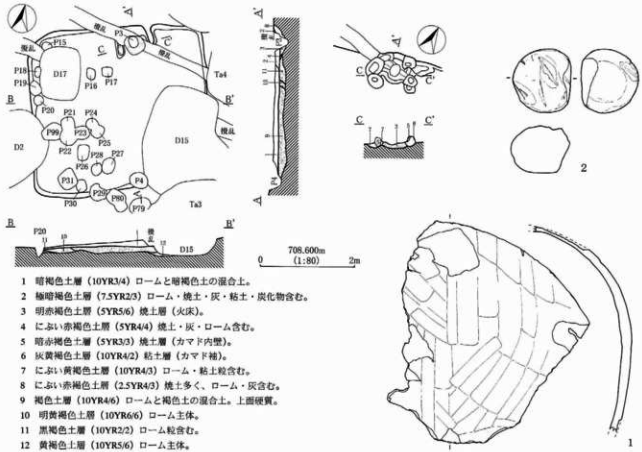
第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址（Ｈ）

Ｈ１号住居址

遺構は7グリッドに位置し、D2・15・17及び多数のピットに切られる。規模は南北3.4m、東西3.8m、検出面から床面までの深さは最深で10cmを測る。平面形態は方形である。床面は全体的に硬質の貼床が存在する。壁溝及び主柱穴と断定できるピットは確認できなかった。カマドは北壁中央に構築され、袖の一部と火床が残存していたが、部分的にピットに破壊されている。袖は粘土で構築され、西袖先端には石材が埋め込まれ、火床には径40cm、厚さ12cmの焼土が堆積していた。掘方は硬質な貼床直下に10～18cmの厚みでロームと褐色土の混合土が埋め込まれていた。

遺物は土師器甕、須恵器の坏・甕が出土した。全体の形状が残る遺物は無く、大半が破片資料であ



1　暗褐色土層（10YR3/4）ロームと暗褐色土の混合土。
2　極暗褐色土層（7.5YR2/3）ローム・焼土・灰・粘土・炭化物含む。
3　明赤褐色土層（5YR5/6）焼土層（火床）。
4　にぶい赤褐色土層（5YR4/4）焼土・炭・ローム含む。
5　暗赤褐色土層（5YR3/3）焼土層（カマド内壁）。
6　灰黄褐色土層（10YR4/2）粘土層（カマド袖）。
7　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）ローム・粘土粒含む。
8　にぶい赤褐色土層（2.5YR4/3）焼土多く、ローム・灰含む。
9　褐色土層（10YR4/6）ロームと褐色土の混合土。上面硬質。
10　明黄褐色土層（10YR6/6）ローム主体。
11　黒褐色土層（10YR2/2）ローム粒含む。
12　黄褐色土層（10YR5/6）ローム主体。

Ｈ1号住居址遺構・遺物実測図

る。須恵器坏片には奈良・平安時代と思われるものが含まれるが、遺構周辺は撹乱が激しく、カマド及び床面直上では厚みのある土師器甕片が多数出土することから、須恵器片については周辺の撹乱による混入品と考え、本住居址の時期は古墳時代としたい。

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調	備考
1	土師器	甕	−	−	−	外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ	胴部破片	良	外 明赤褐色 内 にぶい橙色	

番号	器種	器形	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	色調	備考
2	石製品	すり石	6.75	6.08	4.98	97.02	黒褐色	表面すり面、条痕あり 軽石製

H１号住居址遺物観測表

第２節　竪穴状遺構（Ta）

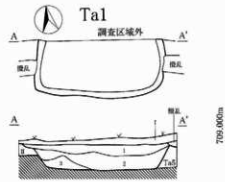
竪穴状遺構は竪穴建物址・竪穴遺構とも呼ばれ、中世以降の遺跡から発見される代表的な遺構の一つである。形態は方形、長方形が多く規模は2m前後から時には10mを越す大型も確認されている。使途不明の掘り込みも多いが、基本的には建物址とされ、人々の住居、兵事の簡易住居、季節的住居、貯蔵庫、作業場、集会場などと考えられている。

本遺跡では多数の掘り込みが確認されているが、今回は土坑と区別するために長辺が2mを越す掘り込みを竪穴状遺構として取り扱った。

遺物は鉄製角釘・古銭・砥石・陶磁器・弥生土器・土師器・須恵器が出土している。周辺地域は弥生から中世の複合遺跡で、弥生から平安時代の住居址も多数存在していることから、鉄釘・陶磁器等が出土する遺構に含まれる弥生土器・土師器・須恵器については、遺構が埋まる際に混入した遺物と考えられる。

Ta1号竪穴状遺構

遺構は2グリッドに位置し、Ta5を切り、北側は調査区域外となる。調査規模は東西2.6m、南北1.1m、検出面から底面までの深さは50cmを測る。平面形態は調査範囲の状況から方形または長方形と考えられる。底面は地山のローム土となり、床状の硬質面等は認められなかった。遺物は須恵器・土師器片が数点出土した。時期は、主に鎌倉・室町時代に使用された輸入銭が周辺から出土するため中世とし、土師器・須恵器については埋土時の混入と考えられる。

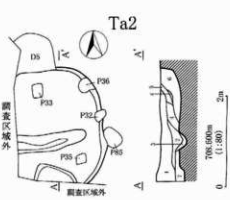


Ⅰ　極暗褐色土層（7.5YR2/3）耕作土。
Ⅱ　黄褐色土層（10YR5/8）ローム。
Ⅲ　にぶい黄橙色土層（10YR7/4）ローム。
1　暗褐色土層（7.5YR3/4）ローム・軽石・炭化物含む。
2　褐色土層（7.5YR4/4）ローム・軽石やや多く、炭化物含む。
3　褐色土層（7.5YR4/6）ロームと暗褐色土の混合土。
　軽石・炭化物含む。

Ta1号竪穴状遺構実測図

Ta2号竪穴状遺構

遺構は12グリッドに位置し、西及び南側の一部は調査区域外となる。調査規模は東西1.8m、南北2.2m、検出面から底面までの深さは40cmを測る。底面に幅36cm内外、深さ20cmの溝及び南壁際に土坑が存在し、硬質面が一部に存在した。溝については、土層断面では、底面から20cmほど高い位置から掘りこまれている状況を示していた。遺構が廃棄された後に何らかの利用がされた可能性も考えられる。また、底面に平面形態が方形のピット2個、壁際に3個が存在した。壁際のピットが伴うピットであるかは断定できない。遺物は、古銭の破片、須恵器・土師器片が出土した。時期は輸入銭の出土から中世とし、須恵器・土師器片は埋土時の混入と考えられる。



1

1　暗褐色土層（10YR3/4）ロームと暗褐色土の混合土。
2　黒褐色土層（10YR2/3）ローム・軽石含む。
3　にぶい褐色土層（7.5YR5/4）ローム多く含む。しまりなし。
4　明黄褐色土層（10YR6/6）ロームブロック含む。
5　暗褐色土層（7.5YR3/4）ローム・軽石・炭化物含む。
6　褐色土層（7.5YR4/4）軽石・ロームブロック・炭化物含む。
7　にぶい褐色土層（7.5YR6/3）ロームブロック含む。

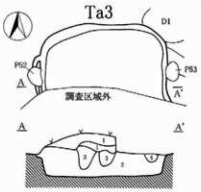
Ta2号竪穴状遺構　遺構・遺物実測図

番号	器　種	器　形	残存長cm	残存幅cm	残存厚cm	重量g	色調	備　考
1	須製品	古墳	1.7	0.85	0.15	(0.499)	暗灰色	3/4欠損　一一一

Ta2号竪穴状遺構　遺物観察表

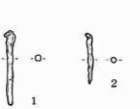
Ta3号竪穴状遺構

遺構は6グリッドに位置し、南側は調査区域外となる。調査規模は東西2.5m、南北1.4m、検出から底面までの深さは55cmを測る。平面形態は、調査状況から方形又は長方形と考えられる。底面は地山のローム土となり、床状の硬質面等は認められなかった。東西の壁際にピットが存在した。遺物は須恵器・土師器・陶磁器片が出土した。時期は陶磁器片の出土及び周辺遺構から輸入銭が出土していることから中世とし、土師器・須恵器については埋土時の混入と考えられる。



I　極暗褐色土層（7.5YR2/3）耕作土。
1　褐色土層（10YR4/6）軽石・ローム・炭化物含む。しまりなし。
2　褐色土層（10YR4/4）軽石・ローム・炭化物含む。
3　暗褐色土層（10YR3/4）軽石・ローム・炭化物含む。
4　暗褐色土層（10YR3/4）ロームブロック含む。しまりなし。

708.900m
0　(1:80)　2m



Ta3号竪穴状遺構　遺構・遺物実測図

番号	器　種	器　形	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	色調	備　考
1	鉄製品	角釘	7.91	1.14	0.92	9.56	赤褐色	表面錆付着
2	鉄製品	角釘	5.29	0.66	0.67	2.97	赤褐色	表面錆付着

Ta3号竪穴状遺構　遺物観察表

Ta4号竪穴状遺構

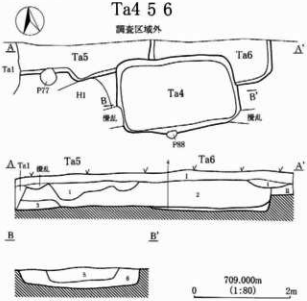
遺構は1グリッドに位置し、Ta5・6を切る。規模は東西2.4m、南北1.4m、検出面から底面までの深さは45cmを測る。平面形態は東西方向に長い長方形である。底面は地山のローム土となり、床状の硬質面等は認められなかった。時期は、周辺から輸入銭が出土していることから中世としたい。

Ta5号竪穴状遺構

遺構は2グリッドに位置し、Ta1・4に切られ、Ta6と切り合い関係にあるがはっきりとした新旧関係は確認できなかった。調査規模は南北0.6m、東西はTa6との新旧及び境界が平面・土層断面からも断定できなかったため、不明としたい。検出面から底面までの深さは25cmを測る。底面は地山のローム土となり、床状の硬質面等は認められなかった。時期は、周辺遺構から、輸入銭が出土していることから中世としたい。

Ta6号竪穴状遺構

遺構は1グリッドに位置し、Ta4に切られ、Ta5と切り合い関係にあるがはっきりとした新旧関係は確認できなかった。調査規模は南北1.1m、東西は底面の段差から2.4m内外と考えられる。検出面から底面までの深さは35cmを測る。底面は



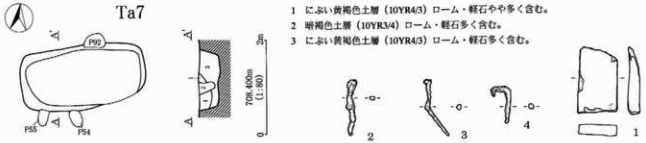
I　極暗褐色土層（7.5YR2/3）耕作土。
II　黄褐色土層（10YR5/8）ローム。
1　褐色土層（7.5YR4/4）ローム・軽石含む。
2　褐色土層（7.5YR4/6）ローム・軽石・炭化物含む。
3　褐色土層（10YR4/4）ローム・軽石多く含む。
4　黄褐色土層（10YR5/6）ローム主体。
5　暗褐色土層（10YR3/4）ローム・軽石・炭化物含む。
6　褐色土層（10YR4/6）ローム・ロームブロック・軽石・炭化物含む。

Ta4・5・6号竪穴状遺構実測図

地山のローム土となり、床状の硬質面等は認められなかった。時期は周辺遺構から輸入銭が出土していることから中世としたい。

Ta7号竪穴状遺構

遺構は11グリッドに位置する。規模は東西2.4m、南北1.2m、検出面から底面までの深さは45cmを測る。底面は地山のローム土となり、床状の硬質面等は認められなかった。遺物は鉄製角釘・砥石、弥生土器・土師器・須恵器片が出土した。時期は形状及び角釘の出土、周辺から輸入銭が出土していることから中世とし、弥生土器・土師器・須恵器片については埋土時の混入と考えられる。



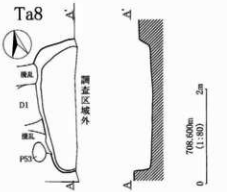
Ta7号竪穴状遺構　遺構・遺物実測図

番号	器種	器形	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	色調	備考
1	石製品	砥石	6.98	4.1	1.25	59.11	灰白色	底面4
番号	器種	器形	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	色調	備考
2	鉄製品	角釘	<6.15>	0.98	0.81	5.65	赤褐色	表面錆付着　先端一部欠損
3	鉄製品	角釘	7.02	0.8	0.75	3.97	赤褐色	表面錆付着　くの字曲がり
4	鉄製品	角釘	5.35	0.89	1	5.5	赤褐色	表面錆付着「状に曲がり

Ta7号竪穴状遺構　遺物観察表

Ta8号竪穴状遺構

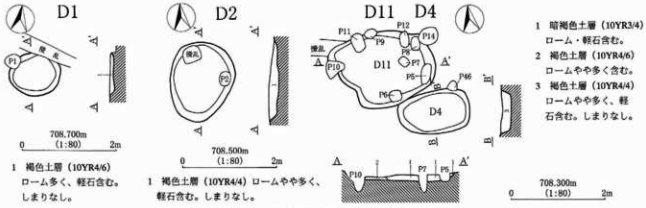
遺構は6グリッドに位置し、東側は調査区域外となる。調査規模は南北2.8m、東西は最大で80cm、検出面から底面までの深さは50cmを測る。底面は地山のローム土となり、床上の硬質面は認められなかった。遺物は出土しなかった。時期は、遺構の形状が周辺の陶磁器を出土する竪穴状遺構と同様であり、周辺遺構から輸入銭が出土していることから、中世としたい。



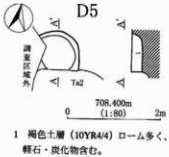
Ta8号竪穴状遺構実測図

第3節　土坑（D）

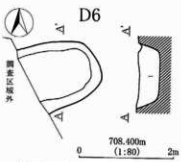
竪穴状遺構及びピットと区別するため、直径または1辺が30cm以上で2mに満たない掘り込みを土坑として取り扱った。形態は方形が多く、輸入銭が出土する遺構も含まれる。



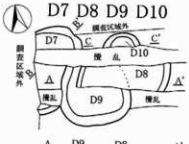
土坑実測図（1）



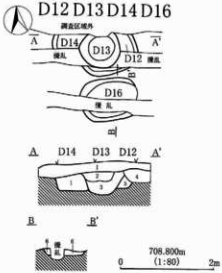
1 褐色土層（10YR4/4）ローム多く、軽石・炭化物含む。



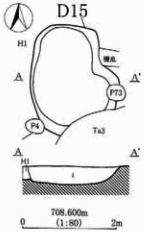
1 褐色土層（10YR4/4）ロームやや多く、軽石含む。しまりなし。



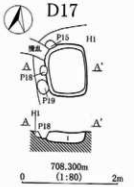
1 暗褐色土層（10YR3/4）ローム・軽石・炭化物含む。
2 暗褐色土層（7.5YR3/3）ローム・軽石・炭化物含む。
3 褐色土層（7.5YR4/4）ロームやや多く、軽石・炭化物含む。
4 暗褐色土層（10YR3/4）ローム・軽石やや多く含む。



I 極暗褐色土層（7.5YR2/3）耕作土。
1 褐色土層（10YR4/6）ロームと褐色土の混合土。軽石含む。
2 明黄褐色土層（10YR6/6）ローム主体。
3 褐色土層（10YR4/4）ローム・軽石含む。
4 褐色土層（10YR4/6）ローム多く、軽石含む。
5 褐色土層（10YR4/6）ロームブロック・ローム多く含む。
6 褐色土層（10YR4/4）ロームやや多く、軽石含む。しまりなし。



1 暗褐色土層（10YR3/4）ローム・軽石含む。しまりなし。



1 暗褐色土層（10YR3/4）ローム・軽石・炭化物含む。

土坑実測図（2）

土坑遺物実測図

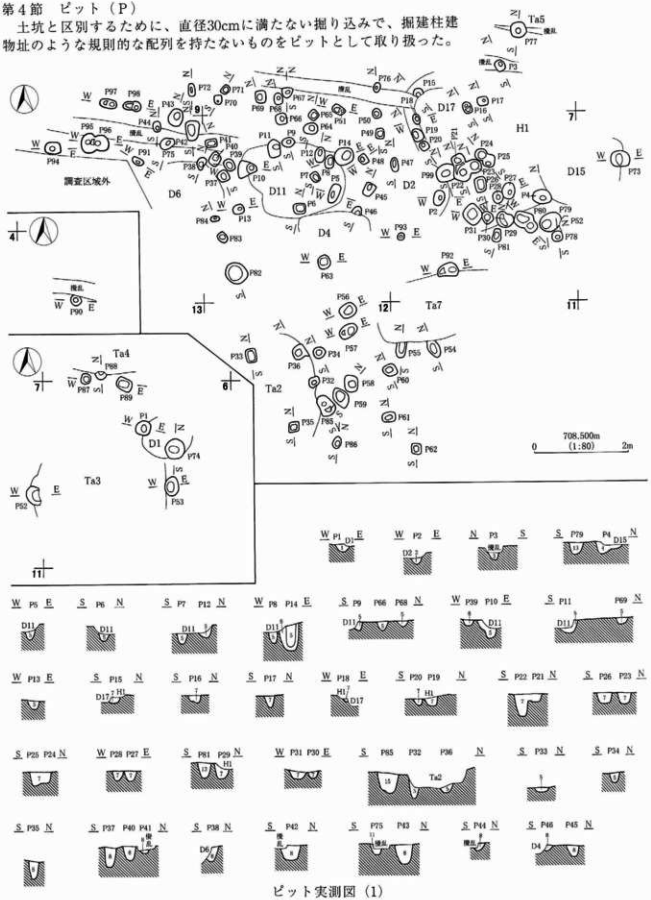
番号	器種	器形	長さcm	幅cm	厚さcm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調	備考
1(D11)	かわらけ	坏	[10]	[7.5]	2.7	内外面ヨコナデ 底部回転糸切り	20	良	外 にぶい橙色 内 にぶい橙色	

番号	器種	器形	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	色調	備考
2(D9)	鉄製品	不明	(2.6)	(1.7)	(0.6)	(1.85)	赤褐色	表面錆付着 中央部欠損
3(D7)	銅製品	古銭	2.45cm	2.45cm	0.2cm	3.28	緑灰色	完緡通貨 篆書 初鋳年 北宋 1086 年
4(D11)	銅製品	古銭	2.45cm	2.45cm	0.2cm	2.45	緑灰色	開元通貨 初鋳年 621 か 845 年の判別不明 一部欠損

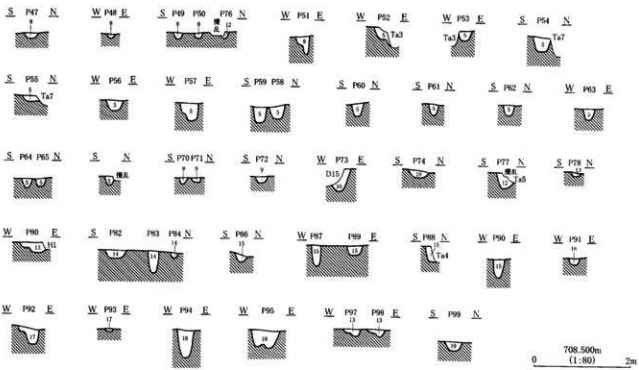
土坑遺物観察表

第4節　ピット（P）

土坑と区別するために、直径30cmに満たない掘り込みで、掘建柱建物址のような規則的な配列を持たないものをピットとして取り扱った。



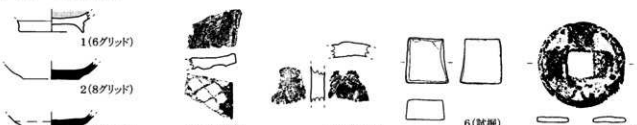
ピット実測図（1）



1 黒褐色土層（10YR2/3）ローム・軽石含む。しまりなし。
2 暗褐色土層（10YR3/3）ロームブロック含む。しまりなし。
3 黒褐色土層（10YR2/3）焼土・炭化物・粘土含む。
4 黒褐色土層（10YR2/3）しまりなし。
5 暗褐色土層（10YR3/4）しまりなし。
6 褐色土層（10YR4/4）ローム多く含む。
7 暗褐色土層（10YR3/3）ローム・軽石・炭化物含む。
8 暗褐色土層（10YR3/4）炭化物含む。しまりなし。
9 にぶい黄褐色土層（10YR4/3）ローム多く含む。
10 にぶい黄褐色土層（10YR4/3）ローム・軽石・ロームブロック含む。しまりなし。
11 暗褐色土層（10YR3/3）ローム・軽石含む。
12 黒褐色土層（10YR2/3）ローム・軽石含む。
13 暗褐色土層（10YR3/3）ローム・軽石含む。しまりなし。
14 褐色土層（10YR4/4）ローム多く、軽石含む。
15 にぶい黄褐色土層（10YR4/3）ロームブロック・軽石多く含む。しまりなし。
16 暗褐色土層（10YR3/4）ローム・軽石やや多く含む。
17 にぶい黄褐色土層（10YR4/3）ローム・軽石多く含む。
18 暗褐色土層（10YR3/4）ロームやや多く含む。しまりなし。
19 にぶい黄褐色土層（10YR4/3）黒褐色土とロームの混合土。しまりなし。

ピット実測図（2）

第5節　遺構外遺物

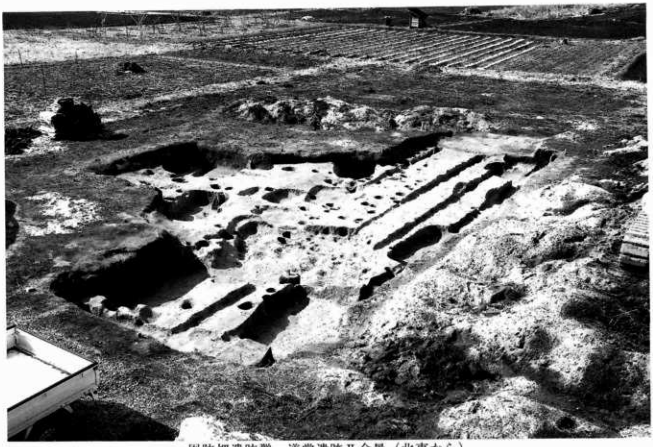


遺構外遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調・外面・内面	
1 (6グリッド)	土師器	椀	－	6.9	(2)	底部回転糸切り後台付け　脇や台付部周辺ナデ　内面黒色処理	底1/6	良好	外 にぶい橙色 内 黒色	
2 (8グリッド)	須恵器	坏	－	[6]	(1.8)	内外面ロクロナデ　底部回転糸切り	底1/6	良好	外 灰白色 内 灰白色	
3 (攪乱)	須恵器	坏	－	[6]	(1.3)	内外面ロクロナデ　底部回転糸切り	底部破片	良好	外 にぶい橙色 内 にぶい橙色	
4 (4グリッド)	古瓦	平瓦	残存長cm 13	残存幅cm 9	残存厚cm 1.7	表面ナデ・横方向ヘラ　裏面ナデ	破片	良	外 にぶい赤褐色 内 暗赤褐色	
5 (4グリッド)	古瓦	丸瓦	残存長cm 3.6	残存幅cm 3.3	残存厚cm 1.2	表面ナデ　裏面布目	破片	良	外 にぶい橙色 内 にぶい橙色	

番号	器種	器形	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	色調	備考
6 (試掘)	石製品	紡石	4.81	4.4	2.42	83.41	灰白色	凝灰岩
7 (試掘)	銅製品	古銭	残存長cm 2.32	残存幅cm 0.61	厚さcm 0.16	2.76	緑灰色	開元通宝　初鋳年唐 621、唐 845、唐 960 の判別不明

遺構外遺物観察表



周防畑遺跡群　道常遺跡Ⅱ全景（北東から）

表土除去作業（西から）

調査風景1（東から）

調査風景2（北東から）

H1号住居址全景（南から）

H1号住居址カマド（南から）

H1号住居址カマド掘方（南から）

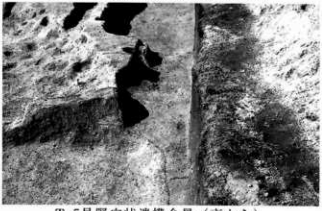
H1号住居址掘方（南東から）

Ta1号竪穴状遺構全景（東から）

Ta2号竪穴状遺構全景（東から）

Ta3号竪穴状遺構全景（北西から）

Ta4号竪穴状遺構全景（南西から）



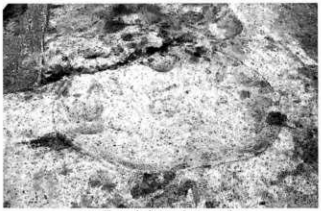
Ta5号竪穴状遺構全景（東から）

Ta6号竪穴状遺構全景（東から）

Ta7号竪穴状遺構全景（北から）

Ta8号竪穴状遺構全景（西から）

D1号土坑全景（南西から）



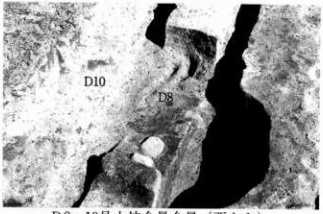
D2号土坑全景（西から）

D4号土坑全景（北から）

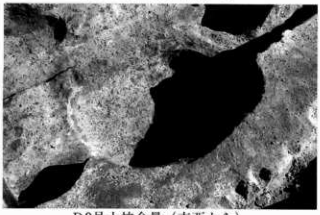
D5号土坑全景（東から）

D6号土坑全景（西から）

D7号土坑全景（南から）

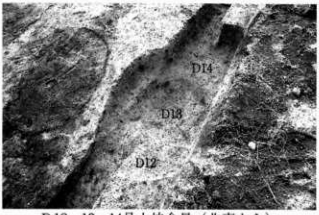


D8・10号土坑全景全景（西から）



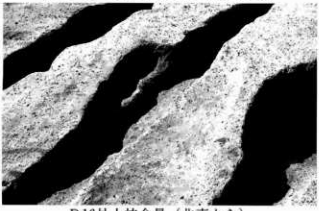
D9号土坑全景（南西から）

D11号土坑全景（西から）



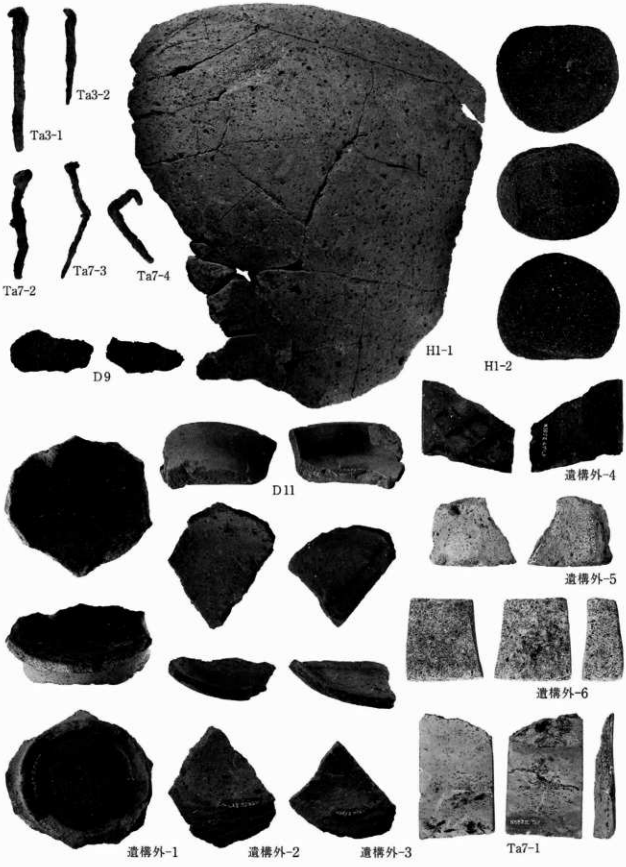
D12・13・14号土坑全景（北東から）

D15号土坑全景（南から）



D16号土坑全景（北東から）

D17号土坑全景（西から）


Ta3-1
Ta3-2
Ta7-2
Ta7-3
Ta7-4
D9
H1-1
H1-2
D11
遺構外-4
遺構外-5
遺構外-6
遺構外-1
遺構外-2
遺構外-3
Ta7-1

出土遺物

古銭

ふりがな	すぼうばたいせきぐん　どうじょういせきに
書　名	周防畑遺跡群　道常遺跡Ⅱ
副 書 名	–
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第213集
編 著 者 名	上原　学
編 集 機 関	佐久市教育委員会文化財課
所　在　地	長野県佐久市志賀5953　TEL 0267-68-7321　FAX 0267-68-7323
発行年月日	平成25年8月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積㎡	発掘原因
すぼうばた いせきぐん どうじょう いせきに	さくし ながとろ あざ どうじょう	20217	7	36° 16′ 58″	138° 27′ 36″	20130131 ～ 20130208	120.26	宅地造成 工事
周防畑遺跡群 道常遺跡Ⅱ	佐久市 長土呂 字道常 1246-1-3 1252-1-2							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
周防畑遺跡群 道常遺跡Ⅱ	集落	古墳時代 中世	竪穴住居址１（古墳）、 竪穴状遺構８（中世）、 土坑16（中世）、 ピット99（中世・近世？）	土師器、石器・石製品、鉄製品 （角釘）、銅製品（古銭）、古 代瓦（丸瓦・平瓦）、須恵器	古墳時代～中近世の遺構・ 遺物が発見された。

要　約	佐久地域特有の、浅間山麓から放射状に延びる、雨水等の浸食によって形成された田切り地形と称する細長い台地末端付近に展開する遺跡である。周辺では区画整理・道路改良・学校建設等に伴う発掘調査によって、弥生時代から中世までの遺構・遺物が多数発見されている。また、周辺地域は、以前から古代瓦が出土する地域として周知され、平・丸瓦に加え、川原寺式の軒丸瓦が散点出土している。 今回の調査対象地からは、古墳時代の住居址１軒、中近世と考えられる竪穴状遺構・土坑・ピットが発見され、特徴的な遺物として、検出段階に古代瓦２片が出土した。

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第213集
周防端遺跡群　道常遺跡Ⅱ
平成25年（2013）8月

編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501　長野県佐久市中込3056
文化財課
〒385-0006　長野県佐久市志賀5953
TEL 0267-68-7321

印　刷　所　臼田活版株式会社
〒384-0301　長野県佐久市臼田2016
TEL 0267-82-2109